

## PureFlow GS1の帯域制御が支える ネットワーク整備

### 経済・金融情報サービスの提供で安心感を確保

アンリツネットワークス(株式会社アイ・エヌ情報センター事例)

株式会社アイ・エヌ情報センター(以下、INIS)は、投資銀行業務を行う大手金融機関向けに、経済や金融に関わる高品質なデータベースをコアとした情報サービスを提供している。07年12月、INISはこの情報提供に利用しているネットワークにPureFlow GS1を導入、社内外の通信を帯域制御することにした。

INISのネットワークは、それまでも十分な回線容量を持ち、特に差し迫った課題があったわけではない。ではなぜPureFlow GS1を導入したのか。そこには、先を見据えたネットワーク整備という、INISの戦略があった。INISの土井 直人氏、遠藤 勝氏にお話を伺った。

#### 経済と企業ファイナンス情報の データベースサービスを提供

「当社では、ビジネス環境情報と企業ファイナンスのデータベースを、大手金融機関の投資銀行企画統括部門から法人／個人の営業部門まで、それぞれの利用形態に合わせて提供する事で、投資銀行業務をトータルで支援しております。世界的に激動する金融資本市場のなかで、大きな注目を集めています」と、アイ・エヌ情報センター営業部副部長の土井 直人氏は語る。

INISでは、最大限に活用出来るアプリケーションを組み



営業部 副部長  
土井 直人氏

合わせ、統合情報サービスとして提供している。マクロ経済や業界動向を知る「INDB Accel」や「Finder Pro」、金融資本市場の動向や個別企業のファイナンスが分かる「Funding Eye」や「Funding View」だ。

「投資銀行業務をトータルに支援する情報サービスが整っ

たのはつい最近の事です。当初は専用のアプリケーションをお客様のPCにインストールして使っていたいただきました。現在ではWeb系のサービスへの移行が進んでいます。このため、お客様のニーズや環境に合わせて、我々の必要とする技術やネットワークも変化してきました」(土井氏)。

「少し前までは調査・企画など限られた専門家の方だけに利用されていましたが、最近はお客様の営業フロントへも拡大しています。こうした方々にお使いいただくには、これまで以上に速報性と信頼性が重要です。そのため、サービスを支えるシステムの基盤も、より強固な、余裕のあるものが必要になってきました」(土井氏)。

#### 安定感を求め余裕を持った ネットワーク環境を検討

サービス開始当初、1カ所で運用していたデータセンターは、バックアップ等の備えもあり、現在は3カ所になった。この3カ所を広域イーサネットで結び、サービスを提供している。

「社外からの情報サービスへのアクセスだけでなく、社内のネットワークも同じ回線を使用しています。現状では特に問題は出ていないのですが、今後、サービスの種類の追加や、ユーザー数拡大が見込まれ、その場合に回線の容量は大丈夫かという懸念が出てきていました。データベースの

サイズも年々大きくなっており、余裕のあるうちに検討しておきたい」と、INISシステム部システム課長の遠藤 勝氏は語る。

外部の情報サービス利用がINISのサービスの要だが、営業の最前線での利用も増え、より即時性が求められている。こうした状況において、安定感



システム部 システム課長  
遠藤 勝氏

のあるサービスを提供するには、急なトラフィックの増加にも耐え得るだけの余裕のあるネットワークが必要だ。

## 帯域制御で顧客からのアクセスを優先

回線容量に余裕を持たせるには、まず考えられるのは回線を太くするか、もしくは回線数を増やすことだ。しかし、これはコストパフォーマンス面がネックとなった。

「回線容量の拡大には比較的大きな投資が必要です。容量を全通信のピークに合わせて確保しておけば安心ですが、平均的な回線利用率は大幅に低下し、コストを考えるとあまりスマートなやり方ではありません。そこで、回線はそのままにして、通信内容によって帯域をコントロールすることを考えたのです。顧客からのアクセスを優先すれば、社内通信は多少パフォーマンスが低下しても、情報サービスのパフォーマンスは落ちません。」(遠藤氏)。

## PureFlow GS1を各拠点に配置して効果

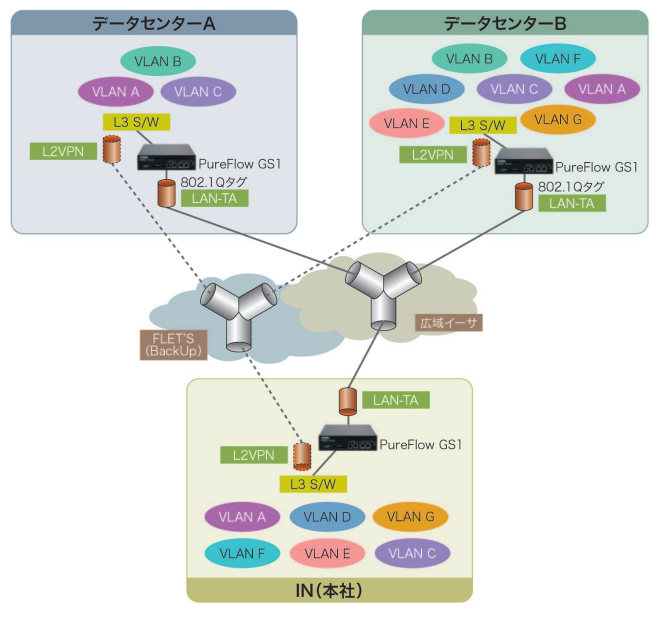
そこでINISでは、帯域制御装置の導入を検討。最終的にPureFlow GS1が選ばれた。

「他社の製品も検討しましたが、高機能であるものの、PureFlow GS1の約3倍と非常に高価で、費用対効果が薄いと感じました。我々の要件には、そこまでの高機能は不要でした。PureFlow GS1では、機材を借りてテストも行うことができ、そこで有効性を十分に検証することができました。本来の通信とは別にデータを流し、帯域を絞ったり広げたりして有効性を確認しましたが、まったく問題はありませんでした」(遠藤氏)。

07年に導入したPureFlow GS1は、3カ所あるデータセンターの出入り口となる箇所に、それぞれ1台ずつ設置されている。設置に際しての設定も非常に簡単だった。

「あっけなくらい簡単に設置できました。もともとバックアップ用の回線を用意していたというもありますが、設置の際にもサービスを止めることなく、スムーズでした。また国内メーカーの製品なので、マニュアルも日本語というのは助かりました。新しくネットワーク機器を入れる場合、心配になるのはサポート体制です。サポートが必要になるケースというのは、緊急を要する場合がほとんどです。海外の製品だと英語での対応であったり、また回答までに何日もかかったりして困った経験があります。PureFlow GS1の

## ネットワーク構成



ように国内でサポートされている製品は、安心して利用できます」(遠藤氏)。

## 複数拠点をまとめてモニタリングする機能も

導入以来、順調稼働のPureFlow GS1だが、今後の展望として、トラフィックのモニタリング等も検討している。

「今はまだ利用していないのですが、複数のPureFlow GS1をまとめて監視できるということで、コンフィグ・マネージャ／モニタリング・マネージャにも興味を持っています。我々のように複数の拠点に導入している場合、まとめて設定したり、トラフィックの監視ができるというのは、非常に便利ではないかと思います」(遠藤氏)。

「特に手堅さを求める金融系のネットワークには、先取りして環境整備を行うという考え方は非常に重要です。今やセキュリティーや安定性は、なにか起こってから対応を考えるのではなく、先を見越した対応を検討しておくことが必要になっていると思います。弊社顧客層が急速に拡大している中、安定したサービスを提供し続けられるネットワーク環境を低コストで、かつ短期に整えられたことは、弊社のビジネス基盤の強化に大きく貢献し、大変評価しています」(土井氏)。

速報性、信頼性が求められる経済・金融情報サービス。今後もPureFlow GS1の帯域制御が支えていく。